

〈追悼文〉 稀有の知識人 中本先生

鴨澤, 巖

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

8

(発行年 / Year)

1995-02-24

稀有の知識人 中本先生

鴨 澤 巖

工場労働者の子が大学の教師になったり、漁民の子が学位を取ったりすることが一向に珍しくない世の中である。だが、御本人自身が労働階級の出身である場合はかなりめずらしく、鉄道員が研究者に転身したりするとジャーナリズムが放っておかない。だが、出自のめずらしさにばかり目を奪われず、研究者の肉体的内実を目を向けるとき、研究者になった後も、庶民としての労働階級の美点とおもわれるものを残している人に出会うことはたいそう稀である。至難の粹抜けの過程で庶民とは一線を画する身構えがかたちづくられてしまうのであろうか。

中本先生は、ご経歴にも明らかなように沖縄本島の奥武島で漁業に従事された後、言語学者になられた方である。先生はどのように魚をとったか、どのように潜ったかなどおりにふれて好んで口にされたので、格別に先生と親しいほどではなかった人々でさえ、先生のウミンチュ談を拝聴する機会にこと欠かなかった。

ところで、わたくしは社会経済地理学を専攻してきた者であって、言語学には門外漢である。そのわたくしにとっても、先生が力を注がれた言語地理学は、地理学の本質を吟味する上でも、また実際的な内容としても関心をそそるものであった。柳田国男の言語圏論にたいして多くの地理学者が関心を示してきたのは幾分かはそのような事情によるものであり、わたくしの場合もまた同様であった。二十年ほど前に法政大学沖縄文化研究所に関連する調査にたずさわることになったわたくしが、研究所の仕事をされていた中本先生のお仕事にひとかたならぬ関心をもつようになったのは当然の成り行きであった。

六、七年ほど前のことであっただろうか、中本先生が講師の労をとってくださって、研究所主催の琉球方言の講習会が開かれた。おりから宮古島で戦前の南洋や台湾への移民の調査を終えたばかりのわたくしは、いいときにうってつけの講習会が開かれたものだと率先して参加したのであった。

中本先生とは、それまでも雑談したり酒の席でご一緒させていただいたり、また先生の琉球方言に関する口頭の調査報告を拝聴したり、報告書を読ませていただいたりしていたので、先生のことをぞんじあげないというのではなかったのだが、先生から直接お教えいただく機会には恵まれていなかった。

教室での先生の講義は、説得力があるだけでなく、なによりも親しみやすいものであった。語学教育的な発音の実習も含まれていて、わたくしをはじめ受講者が先生の期待にほど遠い

段階に呻吟していても、あくまでにこやかに接しられ、いささかもいらいらされることがなかった。

およそ語学や数学の先生が陥りやすい欠点に、往々存在する学習者との圧倒的な学力差から、学習者にたいして不遜になったり、苛立ったりする傾向が挙げられる。中本先生は、誰でも初学の時期があるのは当然といった面持ちで、あくまでも授業そのものが楽しくてならないといった法悦にも近い表情を湛えながら、海のようにゆったりと語学実習を進められたのであった。先生が繰りひろげられた言語学的な新地平に接した喜びとあいまって、忘れがたい一日であった。

先生のご専門について言及するなんの学識もないけれども、察するに、東アジアから東南アジアにかけての天地を視野ににらみすえた雄大な構想と、細かで精しい各地ごとの実証を組み合わせるご研究であったに相違ない。それは、いたずらに「近代化・科学化」の道をひた走り、歴史の厚みを具えた、各地の人々によって具体的に話されている諸言語をむしろ等閑視しがちな道を歩む代わりに、それらの言語と交歓しながら築き上げる豊饒な言語学であって、多少おこがましいが、わたくしたちが地理学で追及している方向と大きくは同類であったのではないだろうか。先生のお仕事にしみじみ共感を覚えていたのはそのためであったにちがいない。

ところで、先生にごく近い比嘉実さんでさえごぞんじなかったことであるから、わたくしがぞんじあげないのは当然であるが、先生のご葬儀の時にはじめて先生が敬虔なクリスチャンでいらしたことがわかった。方言講習会の時の先生の寛容な授業の進め方は、ウミンチュであったご自分をお忘れになることがなかっただけでなく、神の前に万人は平等であると確信しておられたからかもしれない。

だがここでもまた、一般論では片がつきそうにない。世のクリスチャンは往々排他的である。同信者だけで世界をつくり、非信者を近づきにくくする。悟った人々の目から見れば、非信者は異界の人なのであろうか。中本先生の包容力はさてこそ先生の個性によるものなのであろうか。キリスト教の世界がまたわたくしの手のとどかない世界なのではあるが。

はげしい海の労働に従事された経験をだいにあたためてこられたからなのか、それとも神のみ前に敬虔であられたからか、もって生まれたご資質の故か、知識人がえてして陥りやすい醜さから免れることにたぐい稀に成功された中本先生は、ご専門のご業績を達成されるためだけでなく、わたくしたちに清涼の気を吹き込み、幾分かは覚醒させる使命をもって天がわたくしたちのところに遣わされた方だったのでないだろうか。

先生のあまりにも早かったご逝去を、うずめがたい空白感にたじろぎながら、ただただ嘆くばかりである。先生の御霊安かれと心の底からお祈り申し上げます。

1994年9月28日

(法政大学名誉教授)